



京都府新総合資料館（仮称）設計競技

## 「京都学ラウンジ」

京都を凝縮し未来へつなぐ開かれた学術空間の提案



配置イメージ図

京都の膨大な歴史の記録を収蔵し、研究するだけでなく、世界中から訪れる人々がその情報に触れ、学び、未来に伝えていく場所。平安京として開かれて以来、常に政治・文化の中心であり続け、特異な気候風土の中で歴史ある街が育んできたシステムや風景を壊さずにその歴史に新たに参加する建築であること。大規模建築の象徴としての大屋根は新しい姿に生まれ変わります。その下に広がる人々と京都学が会う新たな場を、私たちは「京都学ラウンジ」と名付けました。

### 3つの基本理念

#### 「守る」

国宝を含む貴重な収蔵品を永続的かつ確実に「守る」ための設備・構造が重要となります。日常の維持管理を容易にし、災害時にも安全に対処できるように他の機能とは隔離した構成とし、万が一の場合でも重要な収蔵品には全く影響が及ばない計画とします。

#### 「学ぶ」

資料館・図書館の複合によって大学としての新しい魅力が生まれます。大規模な複合施設の中で研究や演習が行われる諸室は、採光・換気・室内音響・動線など「学ぶ」ための環境として独立性を確保し、快適で落ち着いた学習空間を実現します。

#### 「開く」

各施設が複合して作りあげる、京都学という非常に文化的で濃密な資料、研究、情報をこれからの新しい時代に向けて積極的に「開く」ことで、京都の独自性を世界へ発信することの出来る施設を目指します。

### 歴史的空間構造 京都の都市構造に接続する

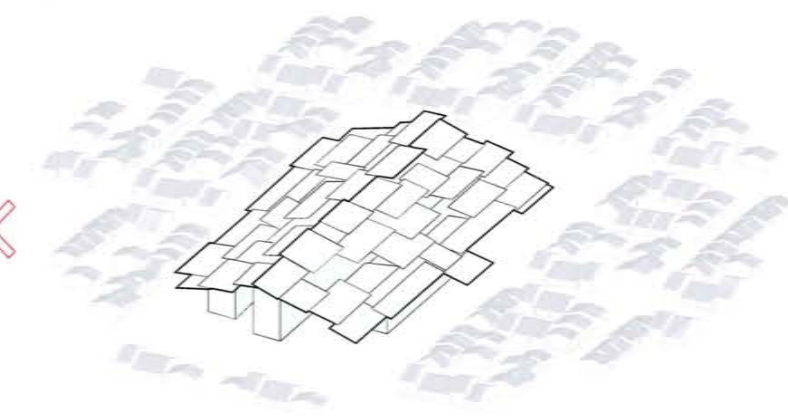
条坊制に基づき1200年にわたって継承されてきた伝統的な都市構造を参照することで、京都の空間性を織り込みながら「資料館」「府立大学」「京都学センター」という3つの機能を融合します。南北方向に主要機能を持った施設を平行配置し、それぞれを横断する動線で結ぶことによって相互の一体利用を促すと同時に周辺とのつながりを生み、様々な方向からアプローチできる回遊性、奥行きが感じられる路地性、情報が凝縮した迷路的学術空間を提案します。



京都の都市構造に接続する学術空間のイメージ

### 新しい大屋根 未来へ向かう環境と風景をつくる

京都は屋根の街であるといえます。町中に存在する寺院や町家の屋根は京都の素晴らしい風景の一部を担っています。寺社などの大規模建築は大きな屋根をその公共性の象徴としてきましたが、この計画では内部の機能や周辺の街のスケールに合わせて大屋根を分節することにより、歴史を継承しながらも全く新たなシンボル性をつくり出します。「京都学ラウンジ」という魅力的な場所を多く生み出す大屋根により、京都の新しい公共空間の姿を実現したいと考えています。

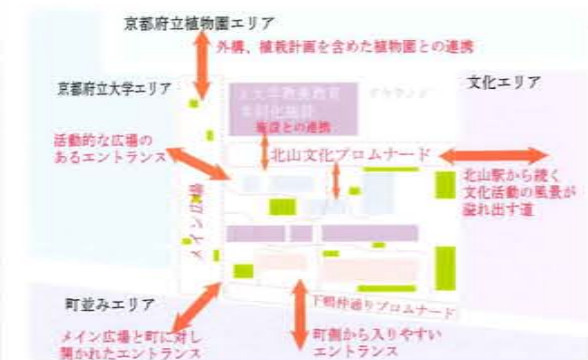


大屋根がつくる新しい風景のイメージ 1

# 1. 施設全体構成

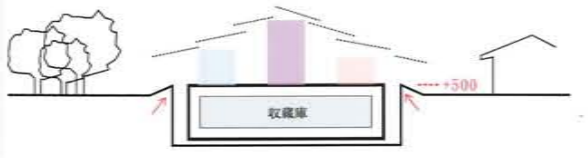
## 周辺環境に接続する平面構成

歴史的な町割りを敷地内に取り込むことで周辺と緩やかにつながる連続的な環境をつくり出し、様々な方向からアプローチできる回遊動線が4つのエリアを結びつけます。全体に掛けられた大屋根の下では外、内、半外部の様々な場所が生まれ、様々な活動が敷地周辺に広がっていきます。



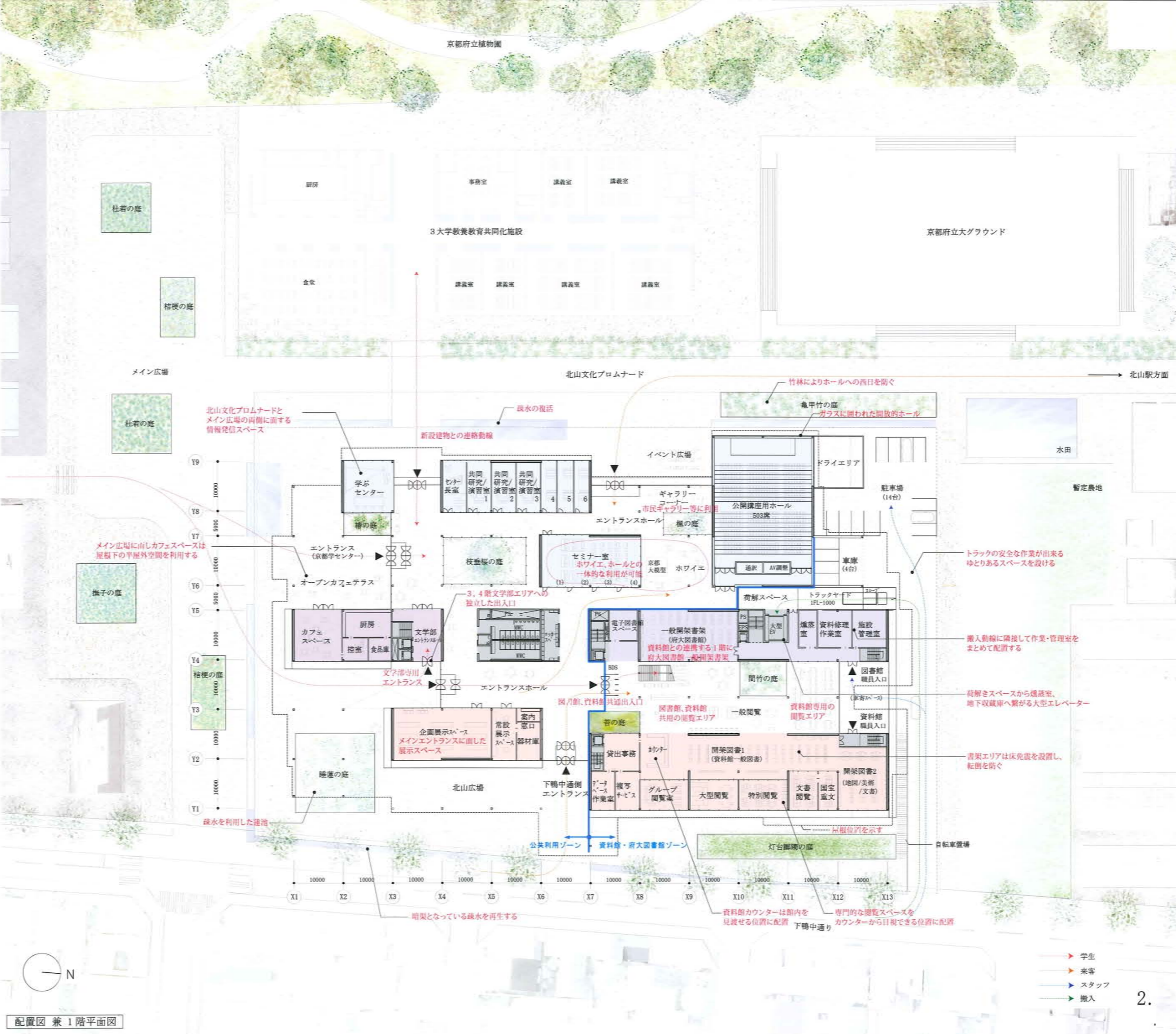
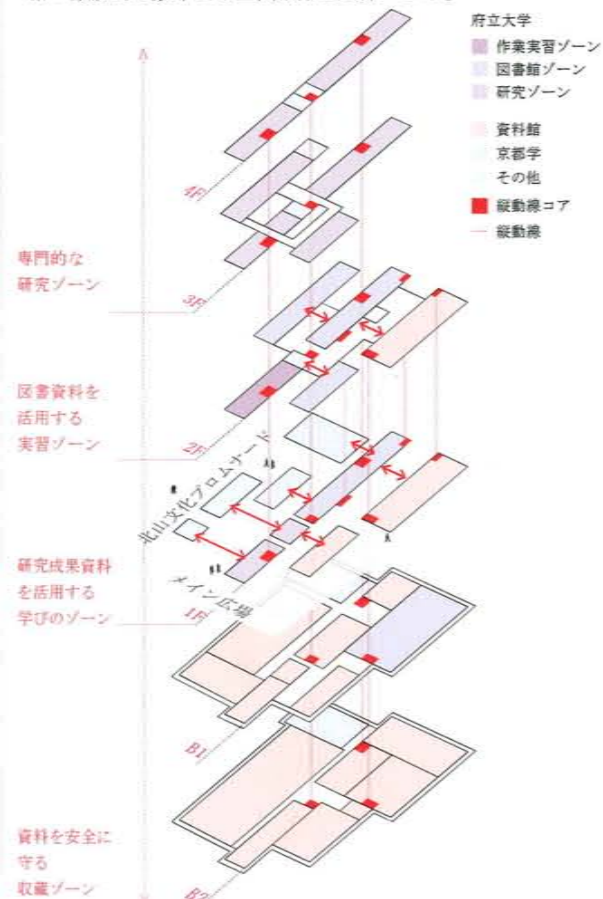
## 地下化された収蔵庫と開かれた地上階の組み合わせ

全ての収蔵庫を集約して地下化し、地上部分と切り離すことで維持管理の合理化と災害時の安全確保を確実にします。ハザードマップを反映し地盤全体を50cm上げ、収蔵庫を完全防水することで浸水対策を万全にし、周辺に巡らせたドライエリアにより湿気を遮断します。一方で上部構造の負担を軽減することができ、地上部の計画の自由度を高めます。

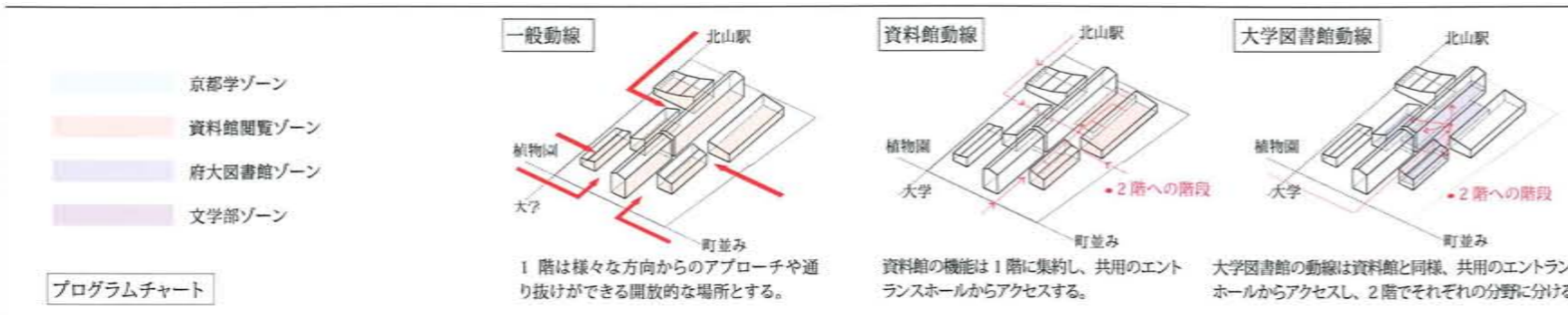
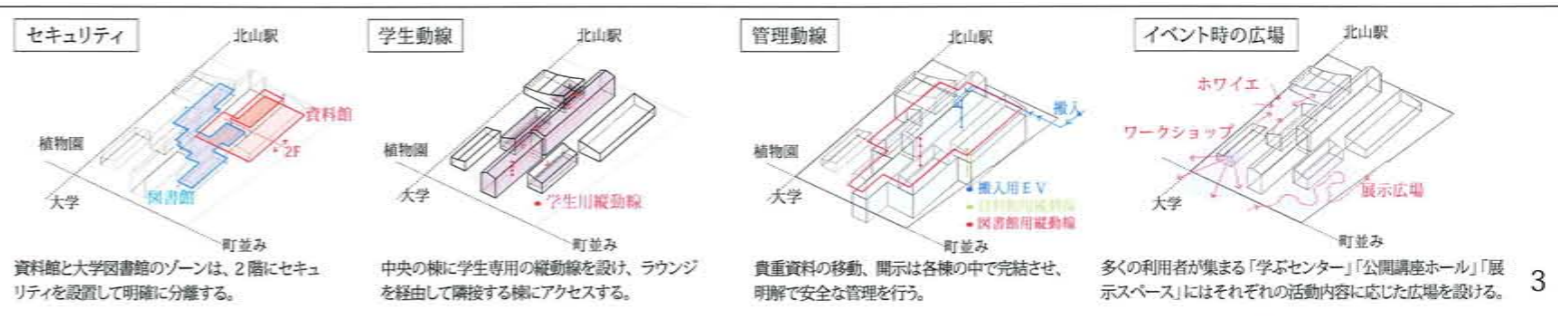
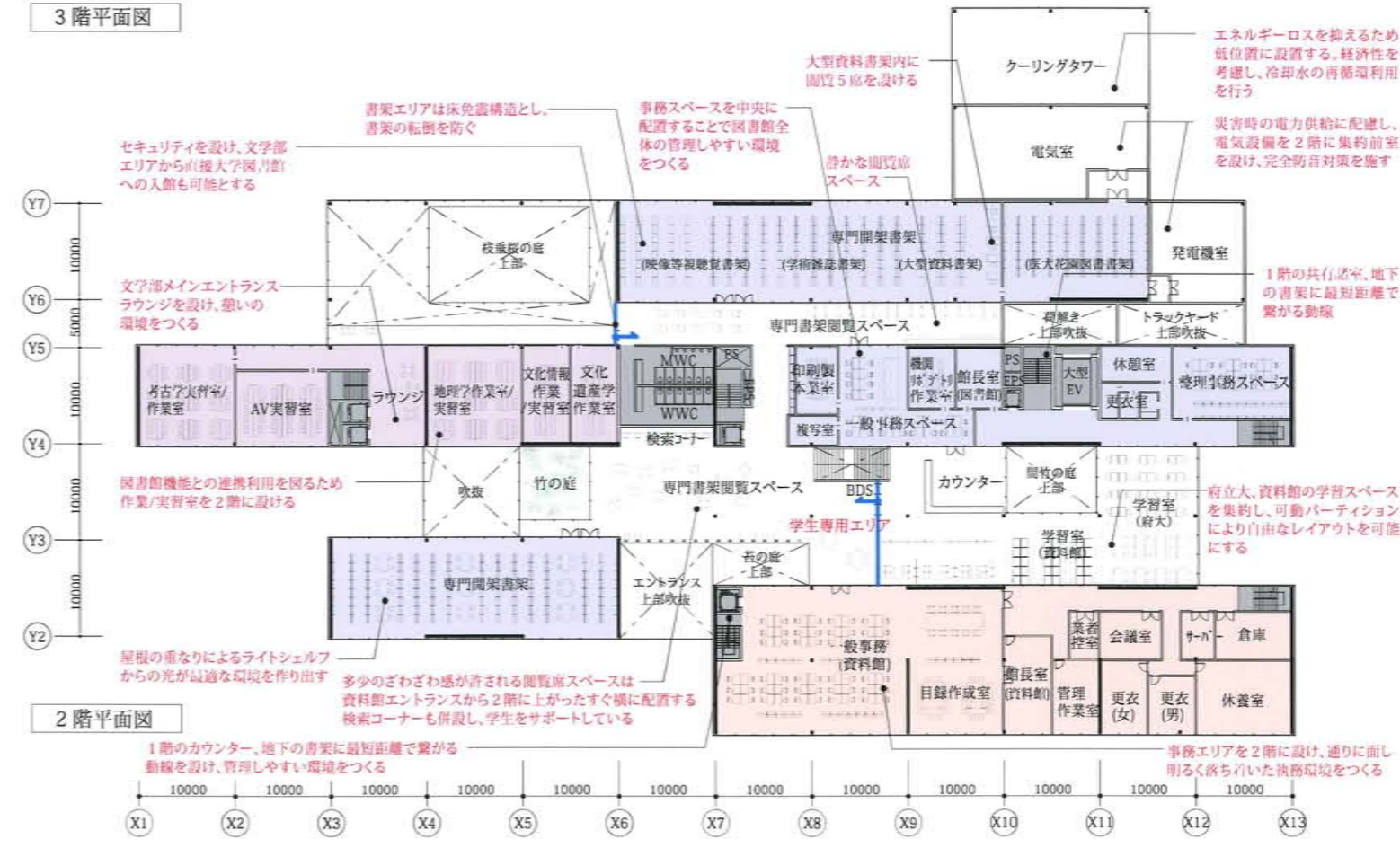
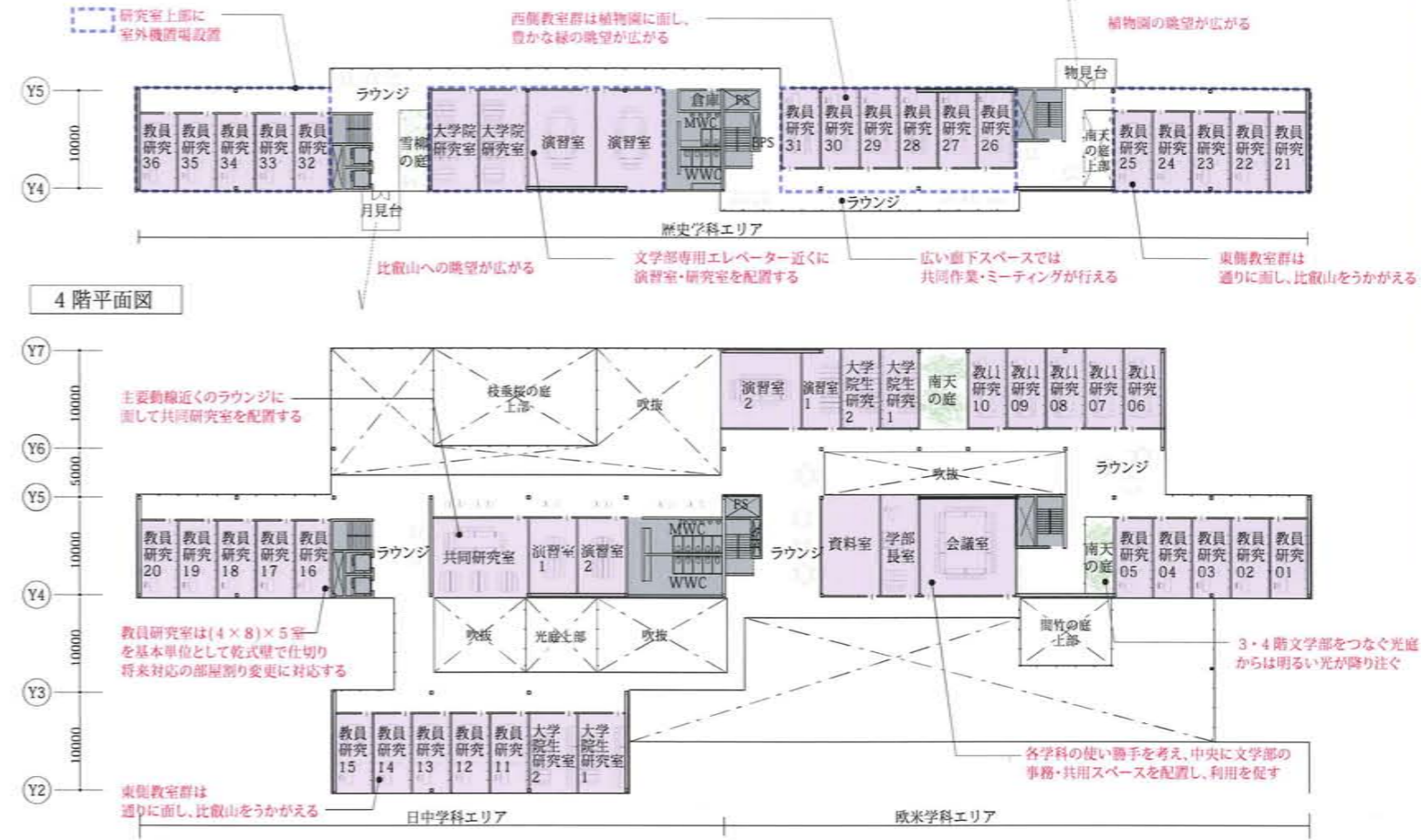
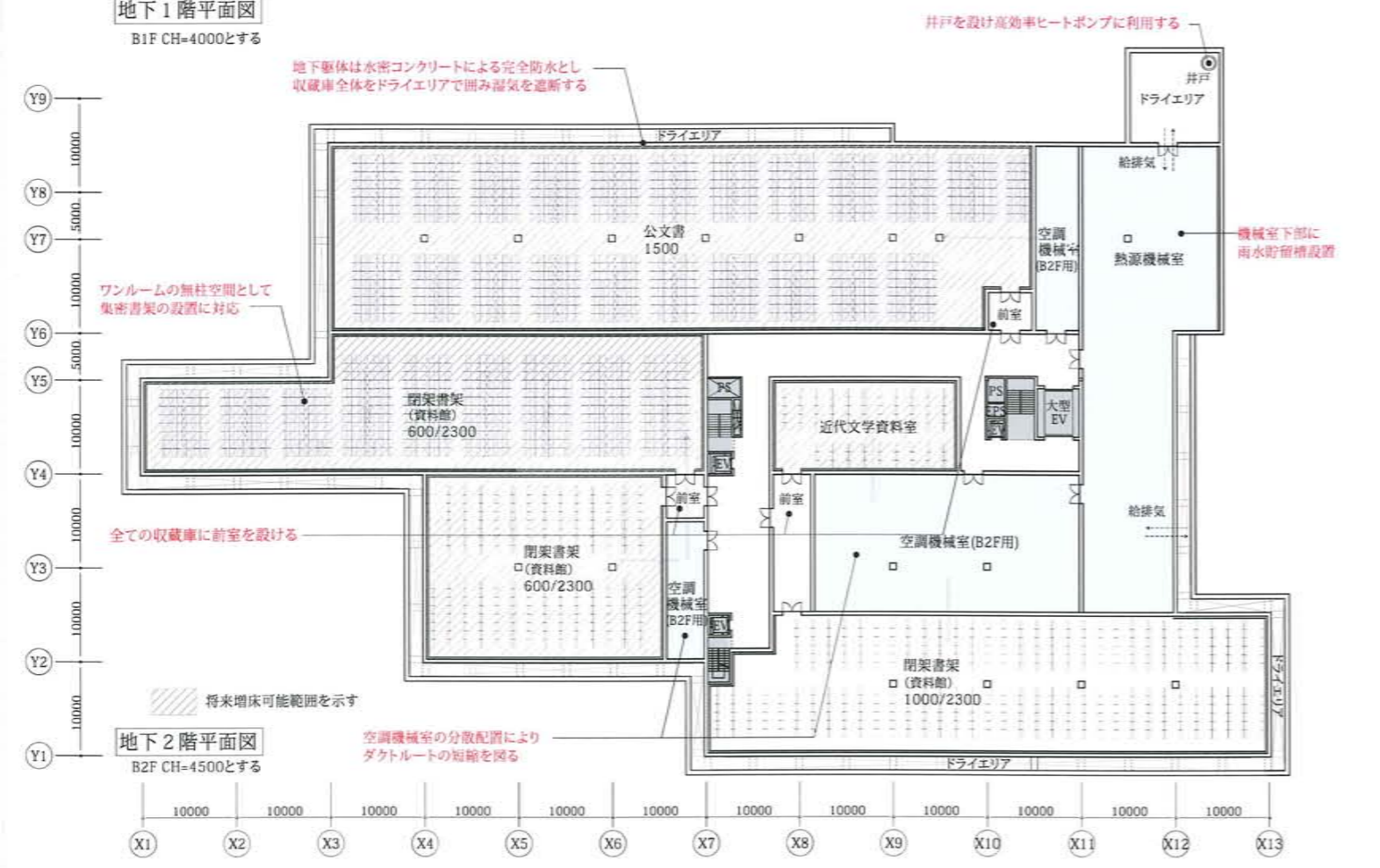
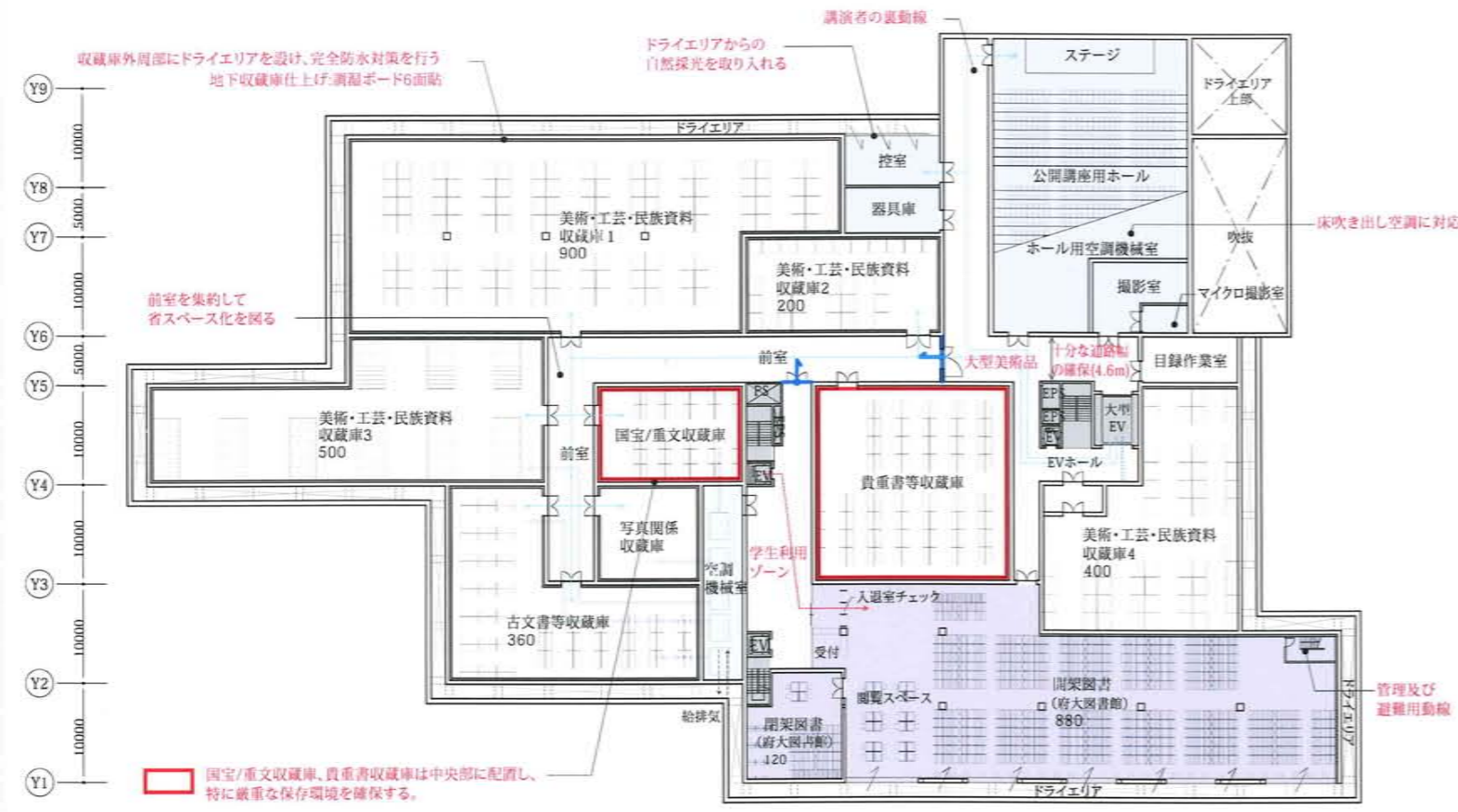


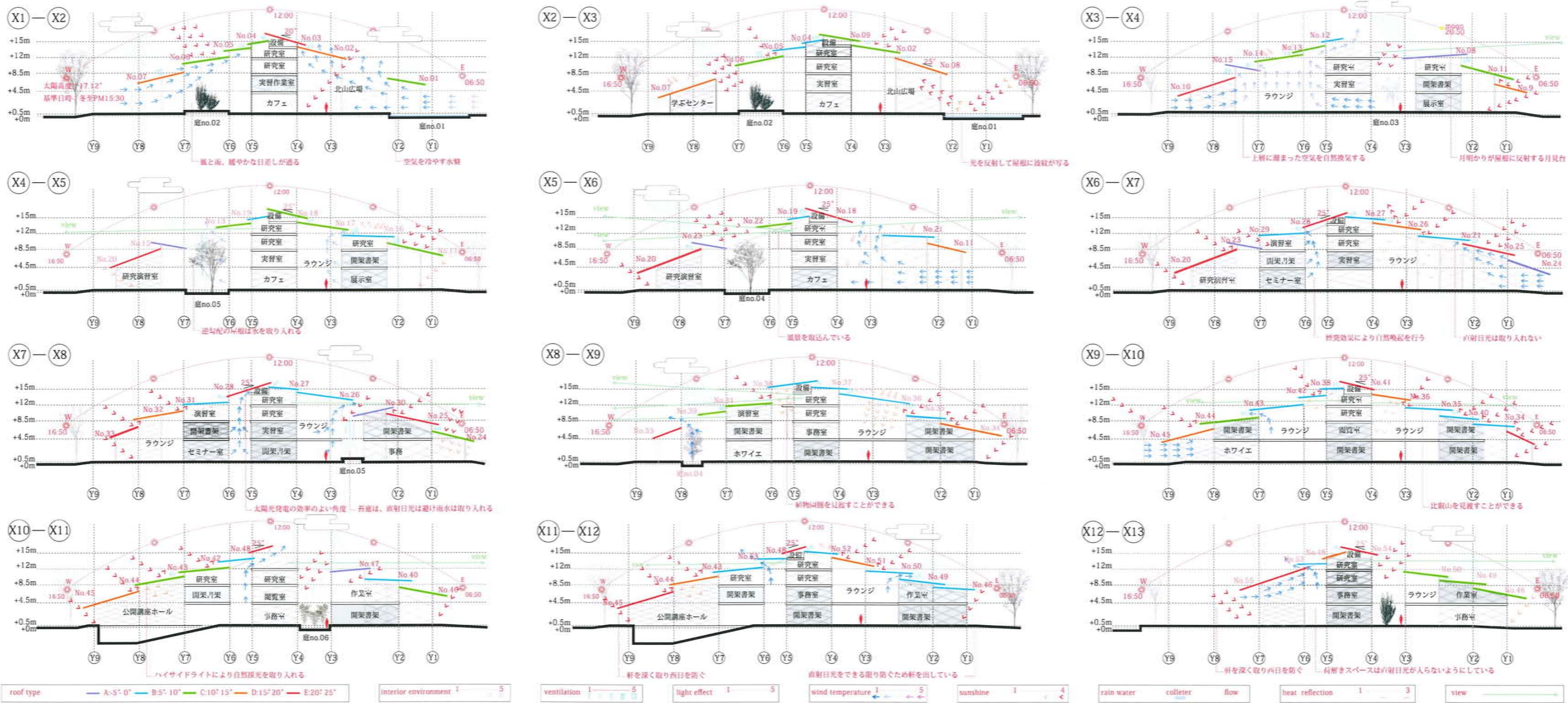
## 大学機能を中心に3部門を統合する

府立大学機能を中心として、資料館、京都学センターを立体的に再編・融合します。各部門の独立性、維持管理、防犯性に配慮してそれぞれを南北に長いボリュームとし、隙間を取りながらプロムナードに平行配置します。隙間の部分が開放的な交流や閲覧のための空間となり、部門間の緩衝空間ともなります。文学部ゾーンのうち資料館と関係の強い「作業室/実習室」は2階に配置し、「研究室/演習室」は3、4階に積層して独立性を高め、縦動線で「図書資料関係ゾーン」と結ぶ機能的で効率的な空間構成を提案します。



配置図 兼 1階平面図





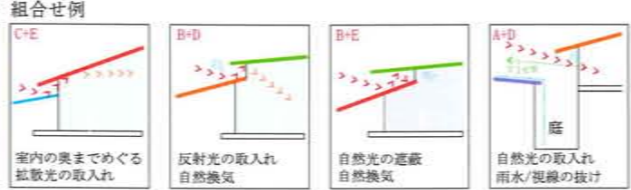
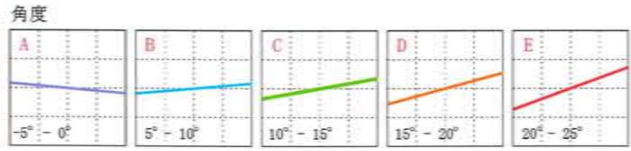
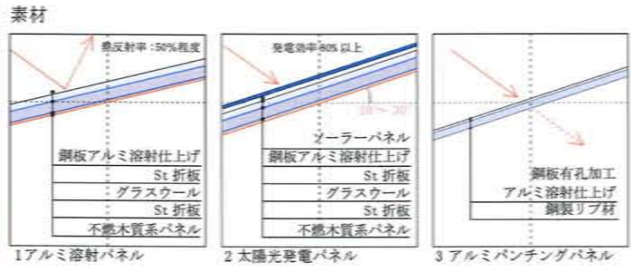
## 2. 大屋根の構成 重なり合う屋根が生み出す新しい環境

施設全体を包み込むように大屋根を掛け、分節した屋根の隙間から室内に光や空気を取り込み、光庭に水を集め、低く伸びた軒先には直射を遮り風が抜ける場所をつくります。それぞれの屋根は重なり合いながら様々な役割を果たして新しい環境を生み出します。空を写し込む屋根面は季節や時間と共に緩やかに変化し、時には青空が、時には月夜が写し出され、眺める角度によっても見え方が変わります。また切片のように分割された屋根面は、周囲の住宅に対する圧迫感を軽減する効果を持っています。

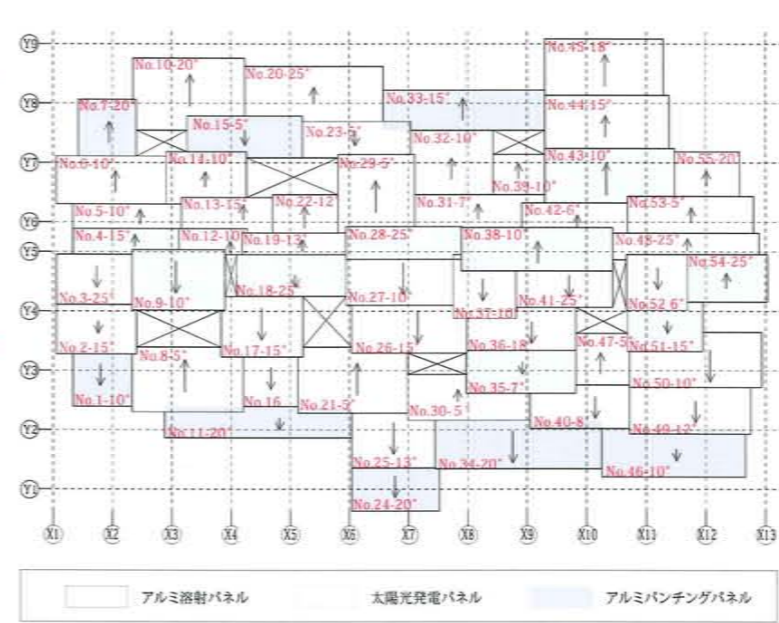


下鴨通りから見た屋根のイメージ

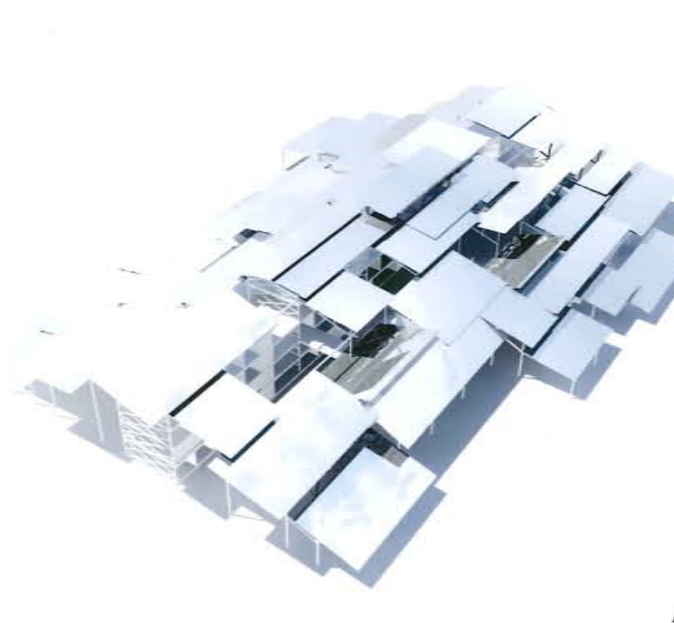
### 大屋根を構成するパネルのバリエーション



### 大屋根伏図



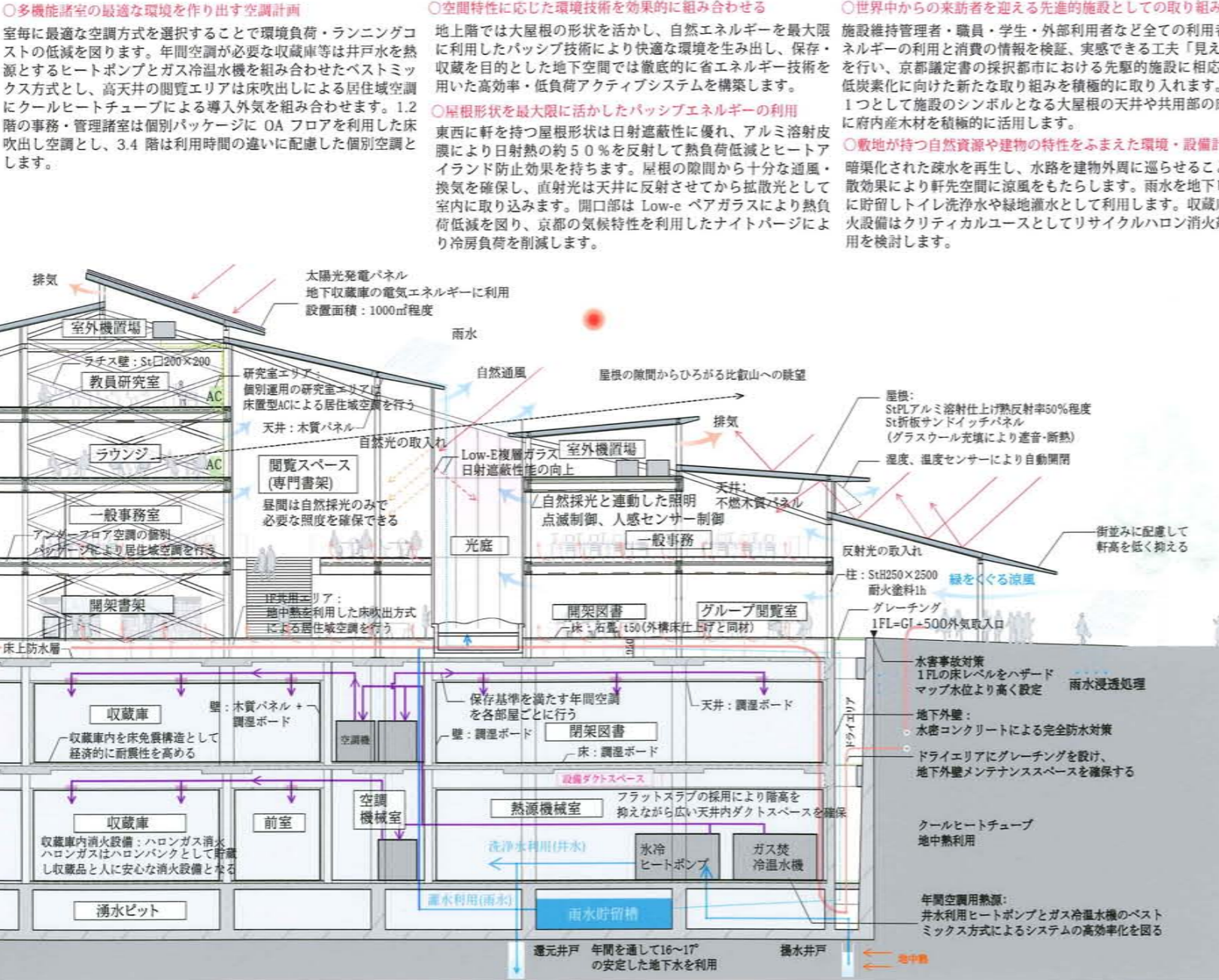
### 大屋根全体イメージ



大屋根の解析図

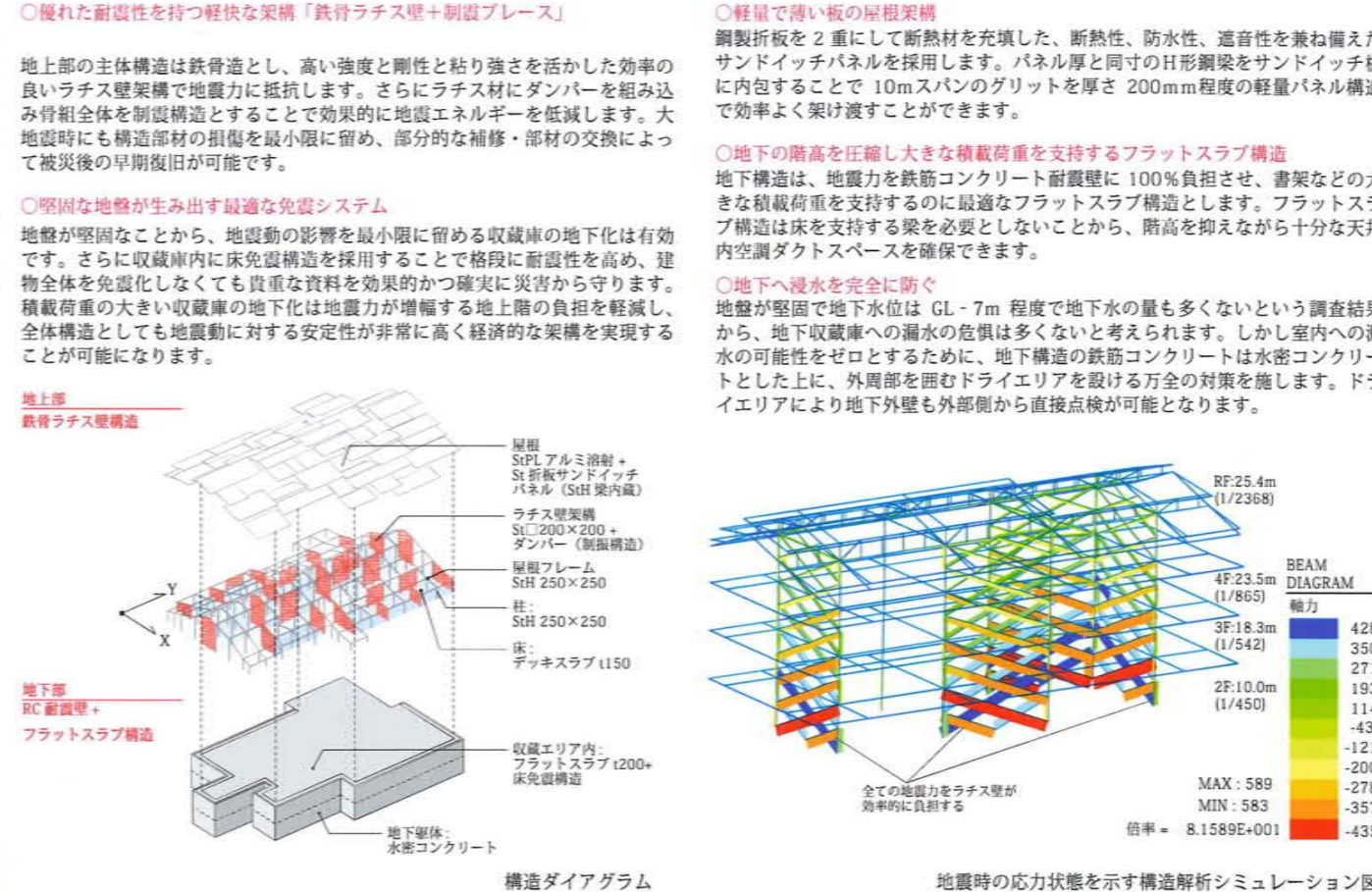
### 3. 設備計画 環境への配慮と徹底した省エネルギー技術の提案

京都の資産を守り未来へ継承していく施設として、様々な最先端の環境技術を取り入れた先進的な施設を目指します。京都議定書に基づくCO2排出削減対策を徹底し、設計の段階でLCC、LCCO2の自己評価を行い設計に反映することでCASBEE Sランクの取得を目指します。



### 4. 構造計画 汎用的な工法で作るシンプルで合理的なシステム

収蔵庫のRC造地下化により建物全体の安定性を確保し、上部構造は鉄骨造 制震ラチス壁付きラーメン構造として二重折板による軽量屋根架構で全体を覆うことにより、空間構造と整合した合理的で信頼性の高い構造計画を効率的に実現します。



### 5. 省エネルギー・省コスト・長寿命化の提案

**施設特性を活かしたトータルライフサイクルコストの低減**

**構造計画**  
 ○鉄骨架構には特殊な部材を用いず一般流通材により構成します。大地震時に備えた交換可能な制震ブレース部材により構造躯体の長寿命化を図ります。  
 ○低重心、安定架構による構造躯体全体の断面の最適化、経済設計を行います。  
 ○地下躯体を構成する水密コンクリートの混和剤は将来にわたってメンテナンスが最小限となり維持費が削減できるためトータルコストを削減できます。  
 ○収蔵庫エリアは床免震システムを採用し、低コストで重要部分の免震化を実現します。

### 6. 植物計画 府立植物園と連携した外構計画の提案

施設内外に京都の文化と縁の深い植物を集め、京都学の資料展示の一つとすることを提案します。府立植物園と連携することで学術的・技術的な相互支援を行い、植物を京都学の一要素として捉えフィールドワークコンテンツとして展示構成することで外部空間も含めた敷地全体が「京都学ラウンジ」となります。

